

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成29年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機 関 名	早稲田大学	整理番号	R04
プログラム名称	実体情報学博士プログラム		
プログラム責任者	橋本 周司	プログラムコーディネーター	菅野 重樹
<p>1. 進捗状況概要</p> <p>異なる専門分野の学生間での共創や学生のグローバルで多様な経験が可能なプログラムとなっており、本プログラムの実施・運営体制は適切に構築されている。また、定員の充足に向けた取組や支援期間終了後の維持継続に向けた学内努力など中間評価結果を踏まえた当初計画の見直しが行われており、それに沿って順調に進捗していると言える。L3を中心とした海外インターンシップは派遣先も海外有力機関など多方面にわたり充実していて、プログラム学生の期待に十分応えている点や、人材輩出の面で活躍の場としてのダイバーシティが確保されていることなど、特色ある学位プログラムへの取組が進んでいる。さらに、プログラム学生の研究題目が単なる機械と情報学とのつながりを超えて幅広い分野に発展しており、実体情報学の実像が見えてきつつあるように思われる。本プログラムの最大の特長と言える工房もますます充実している。L1~L5の間での共同と共創、また、様々な交換を密に行うことにより、一研究室に所属する学生に比べて、このプログラムならではの優れた学生教育が可能であるため、学年を超えた工房での「縦の交流」への積極的な取組が期待される。</p> <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本プログラムの成否のみならず、優秀な人材の継続的な獲得にとっても本プログラムの持続は重要であり、早期に支援期間終了後の継続策を確定することが求められる。また、学内努力をしている点は評価できるが、工房、海外インターンシップ、奨励金の3点が維持できる具体的な方策を早急に確定するよう期待する。 ・「実体情報学」の明確化は本プログラムを継続していく上でも重要と思われる。「実体」の対象としては、当初のように情報と機械の融合としての「実体」に留めず、社会システムや制度等も含めた「実体」への概念拡張を検討する必要がある。ビットコインやシェアリングシステムなど、プログラム開始時には対象として捉えていなかったようなものが、現在は「実体」として重要となっている。そのため、プログラム教員と学生で早期に議論して、「実体情報学」の概念を支援期間終了前に明確化するよう期待する。 ・工房でのL1、L2での活動が、L3以降の学位論文のテーマとなっていく、ある意味で本プログラムの理想的なケースを可能な限り増やしていくことが期待される。 ・工房で学生が加工装置を使って手軽にアイデアを具現化できることは素晴らしいが、手軽さゆえに事故等を起こす懸念や簡易な設置により地震等で危害が及ぶ危険がある。作業しやすい環境が損なわれない範囲で、安全教育と安全確保の工夫をお願いしたい。 ・本プログラムには優秀な学生が揃っている。彼等のキャリアパスを考えると、企業に就職するにしてもアカデミアで活躍するにしても、産業創出を様々な立場で支え、それらが長い目で見た時の大学の発展につながるような形を今から本プログラムに組み込んでおくことが重要と思われる。 ・社会システムまで含めた「実体情報学」の構築には、使う立場に立った文系の文化が重要な役割を果たすものと思われる。そのため、大学全体の文理融合を加速する意味でも「工房」と全学的工房施設「共創館」との連携を積極的に進めてほしい。 			